国語 問題

国語陶冶とラヂオ

岡倉由三郎

國語科學講座

—XII—

國語問題

國語陶冶とラヂオ

岡倉由三郎

株式會社

明治書院

國語科學講座

— XII —

國語問題

國語陶冶とラヂオ

岡倉由三郎

株式會社
明治書院

目次

一　口ことばと目ことば……〈三〉
二　口ことばの優越……〈五〉
三　支那に於ける造字……〈六〉
四　口ことばの機構……〈一一〉
五　聲音の話……〈一五〉
六　ことばの發達……〈二七〉
七　標準語と國語……〈三〇〉
八　國語陶冶の意義……〈三一〉
九　國語陶冶とラヂオ……〈三二〉

國語陶冶とラヂオ

岡倉由三郎

いま私に與へられた、『國語陶冶とラヂオ』といふ問題に就いて、先づ考へるのは、ここに『國語』とは、一般に或る國民の用ひることばといふ意味か、それとも日本の、卽ち我々の國語といふ意味か、といふことである。私はこれを先づ一般的に、一國民、一民族のことばとして考へ、それから次に、さういふ意味の國語の一つとして、我々の用ふる日本の國語といふものを考へるところへ、話を進めたい。次に、その國語の陶冶といふことは、一體可能なものかどうか、これが問題である。我々が改造し矯正しようと思つても、そのもの丶方が、人間の勝手な手だしを許さない性質のものであれば、どうもそれは自然の成行きに委せる外はない。さういふ意味で、この可能性の問題がある。

それから又、その陶冶の一方法として、ラヂオ放送といふことが、どういふ關係を有ち、意義を有つか、その點を最後に述べてみる。かうすればこの、私に與へられた問題を盡すことが出來ようと思ふ。

一　口ことばと目ことば

國語とは何か、これを廣い意味でいへば、或る國民の間に用ひられることばである。ではそのことばとは何かといふと、凡そ己れの意志を他に通ずる手段方便といふことになる。隨つてこの最も廣い意味のことばは、必ずしも口でいふ言葉には限らず、身振り手眞似、目くばせ、意味ありげな咳拂ひなども、この意味では一種のことばである。また或る形に圖をひき、繪を描いて意志を通ずるに使ふとすれば、それも一つのことばである。更に袖を引くとか、抓るとかいふ風に、觸覺に訴へ、或は香を焚いて嗅覺に訴へるといふことも出來る。

かう考へると、ことばといふものゝ種類はいろいろあるが、その主なるものを大別すれば、口から出る音聲の組み合せによつて耳に訴へるものと、圖畫などによつて目に訴へるものと、かう二つに歸着する。ところで此處に問題となるのは、何故人間が、何處の津々浦々へ行つても、この二つのうち口ことばを主なる方法として採用してゐるか。啞者のやうな不幸な境遇の人以外は、目に訴へる圖畫などを意志表示の具としてゐる者はなく、それらは精々口ことばの補助位にしか使はれてゐないのは、何故であるか。即ち口ことばのみが、ことばとして優越の位置を占めてゐるのには、何か理由がなくてはならないといふことである。

極くの太古に於ては、人間はことばといふものを有つてゐなかつた時期があり、それから次第に口ことばと目ことばとを用ひるやうになつたときには、この二つの方法は對等の位置にあつたと考へられる。

こんなことをいふと、人はものを言はなかつた時代があつたかと、訝かる人もあらうが、事實はさうで、人は生れてからことばを習ふ者である。ことばといふものを餘りに使ひ慣れた我々には、ことばは例へば皮膚などのやうに、生れない以前から身についた、先天的なものであるかのやうに思ひ做されがちであるが、實はことばは後から學ばれ

るものなのである。まなぶとは、まねぶで、つまり周圍の人々の眞似をして覺えるのである。だから、假りに外國人の生んだ外國人種の子を、初から我々日本人の手で育てるとすれば、その子は育て親のことば、即ち日本語をこそ話せ、他國のことばなどは、何の跟跡も出さない。これは東北の人が、その子を九州の涯で育てるやうな場合でも同樣で、その子は九州のことばのみを習得する。即ち我々は周圍に行はれてゐることばを、生れてから後に覺えるのである。この點はしつかり知つてゐないと、ことばに對する認識を誤まることがある。

さて通常いふことば、即ち口ことばとは、或る音聲を口から發して、その中に或る意味を約束したものである。かういふ音にはかういふ意味があるものと、約束して通用させてゐるので、丁度紙幣や兌換劵のやうなものである。また或る地方の風俗、例へば着物の色合、着かた、寸法等がいつとなく一定して、それは時代が移るにつれて多少變遷しながらも、やはり大きな、根本的な變りがないのにも似てゐる。この點もしつかり考へられなくてはならぬことである。

次に目ことば、即ち圖畫等によつて意志を表示する上に於ても、事情は略〻同樣で、圖畫を描くには通例それ相應な道具が要る。その道具を母の胎內から有つて出て來る者はないから、これも後天的、即ち生れて以後に習得する方法であることは明かである。

二　口ことばの優越

さてその目ことばと口ことばとが、太古に同時にスタアトを切つたとして、どうしてその一方がひどく發達し、遂

に今日の如く口ことばが主となり、目ことばが従となつたか。その理由が分るためには、目ことばの道具立てと口ことばのそれとを、比較して考へてみなければならない。

先づ口ことばの原料とも動力ともいふべきものは、我々の肺臓から送り出す空氣である。しかもこれは特に口ことばのために造るのでも、起すのでもなく、我々の生活に四六時中、少しも休むことの出來ない呼吸作用のうちの、吐き出す息をそのまゝ利用してゐるのであるから、それは宛も、背戸にいつも流れてゐる水を使つて洗ひ物をしたり、米をつかせたりするのと同様で、全く豐富且つ自在である。

これに反して目ことばの或る形を、描き又は刻むには、手で或る物を使はなければならない。ところが原始生活では、身體を道具に使ふこと、卽ち手足の勞働が多いから、手をふさげるといふことは、生活上大きな邪魔であり、犧牲である。これが目ことばが口ことばの従となり、家來分に落ちた一つの理由である。もとより口ことばの機關たる唇や舌も、飮食をする場合にはその運動を妨げられるけれども、これはほんの一時的のことで、他の仕事ならしながらでも、口ことばは操れる。かういふわけで目ことばは落伍せざるを得なかつたのである。

この二者の關係を話したついでに、如何に初め獨立の繪、卽ち目ことばであつたものが、漸次に口ことばを補助する『文字』となつたか、幸に支那の文字にその痕跡の殘つてゐるところを話して、その邊の事情を明かにしよう。

三　支那に於ける造字

漢字を一と口に象形文字といつて、さながら繪であるかのやうに思つてゐる人もあるが、漢字の中の或るものは、

繪を土臺にして作られたものであるにしても、今日我々の使ふ漢字は、それを見てその示す口ことばの單語を思ひ出し、その單語から意味を悟るのであるから、直接繪の形からその表すものを思ひ起すのとは關係がちがふ。即ちあくまでも『文字』であつて、『繪』ではない。しかし漢字といふものが、元來繪であつたものを材料として出來てゐることは事實である。

支那の學問に『說文』といふものがある。これは支那の文字を分類的に調べたもので、いまから二千數百年前、周の時代に既に支那では文字を六種に分け、之を『六書』といつて兒童に敎へたといふ。

『六書』とは、文字の六種といふことで、その分類法の性質に就いては、多少の議論もあるが、先づ文字を造字、即ち構造上から四種に分け、次に文字の用法の上から二つに分けて、次の六種としたものである。

〔一〕文字の構造によつて分けた四種

(一)象形　(二)指事　(三)會意　(四)諧聲

〔二〕文字の用法によつて分けた二種

(五)轉註　(六)假借(かしゃ)

〔一〕象形　象形とは形を象(かたど)るといふ意味で、物の形を粗雜ながら圖に寫して、目に訴へて意味を通じようとしたもの、例へば『日・月・魚・馬』などの類の文字で、これらは初めはそれぞれ、太陽・月・魚・馬などの形を繪に描いて、口ことばとは無關係

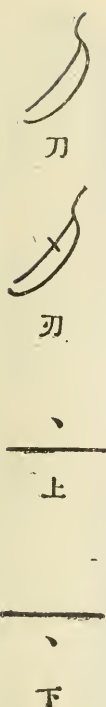
日　月　魚　馬

に、直接それらのものを表した圖畫であつたのが、轉じて出來た文字である。

ところが斯ういふ圖畫が、先にも述べた通り、これを作る手續きの困難から、充分發達を遂げ得ずにゐるうち、口ことばは原料の豐富と、方法の容易さに促されてどんどん發達した。さうして遂に、元來は獨立した繪であつたものが、だんだん直接に物そのものを表すよりは、之を見てその物に對する口ことばの名前を思ひ起させる役目をするやうになつた。卽ち『繪』が『文字』となつたのである。

一例をいへば、馬の形の繪を見て馬そのものを思ひ起すのでなく、『馬』――は『ウマ』といふ音を思ひ出すための符合に過ぎないものとなり、繪としての資格を失つた。そこでその形も、極く古い、所謂、古文に行く程繪に似てゐるが、描く勞力の少いことを目指すために、後になる程形は次第にくづれて來て、或る象形文字の中には、今では昔何を指したものか、見當のつきにくい文字さへ少くないのである。

〔二〕指事　これも一種の象形文字である。が、これは物そのものを全體として指すのでなく、或る物(の繪)を出發點に取つて、そのどの部分といふ風に表すものである。例へば『刀』は、『かたな』を表す象形文字であるが、その一

刀　刃　上　下

部に注意を促すため、一點を加へて、『刃(やいば)』といふ文字が出來てゐる。又、横線の上に點を打つことによつて『上』、下にそれを打つことによつて『下』といふ文字を造つた。かういふ成立ちの文字が指事である。

〔三〕會意　次に會意といふのは、やはり象形の繪形を利用して、繪で表しにくいことを、成程と合點のゆくやう

に造つた文字といふことで、つまり繪を用ひながら、直接そのものを指すのでなく、それに關連した動作などを指すのである。例へば『見る』といふのは一つの働きで、繪に描きやうがない。そこで、足の上へ目を置いてそれを暗示する。また『聞く』といふことも、門の隙間へ耳を置いて、それを表すといふ工合である。

目（象形）　見（會意）　門（象形）　聞（會意）

〔四〕 **諧聲**　これは一名『形聲』ともいふ。その『聲』とは、口ことばの音聲のことで、諧聲とは卽ち、口ことばの音聲を寫した部分に、その音が何を指すかを容易に知らせるために、その指されるものゝ種類を表示する部分を、書き添へた文字である。例へば、青〔siŋ〕 淸・晴・菁などである。

この『青』は〔スィング〕といふ音を表す文字であるが、それが水に關係した意味を指すならば、所謂、『サンズヰ』を添え、また太陽に關したことを指すならば『日ヘン』を添えるといふ風にして造つた文字が諧聲である。さうしてこれが支那の文字の九割を占めてゐる。

いまの例のサンズヰ・日ヘン等のやうに、意味の種類を表示する部分が、卽ち『部首』と稱ばれるものだが、何故さういふものが要るかといふと、それは支那の口ことばの性質上、單語が多く一と綴りの音聲から出來てゐるため、同じ音でありながら意味の異ふ單語が、三つ四つ位はざらで、時には十以上もある場合さへある。そこでこの部首によつて凡そ、水に關する〔スィング〕か、日に關する〔スィング〕か、見當をつけることにしたわけである。

次には文字の使用法から分けた二種がある。

〔五〕 轉註　いつたい一々の事物に對して、一々文字を造つては際限がない。そこで前に述べた構造の中の、諧聲などに依つて殖やしもするが、初め或る物を指すために造られた文字を、形を少しも變へずに、他の事物を指すのに流用することがある。それが卽ち『轉註』で、例へば鳩(ハト)はよく集合するものだから、『鳩(アツ)める』といふ意にその文字を流用し、また『尺度』は物をはかる道具であるから、その度(ド)を『度(ハカ)る』に使ふ、といふ工合である。

この轉註といふことには、議論もあつて、たゞ使用法のみの問題でなく、構造上にも關係がある、といふ人もあるが、やはり使用上のことゝ見るのが正しいと思はれる。我が國の學者の中でも、狩谷掖齋なども、その『轉註考』といふ書物で、そのことを論じてゐる。

〔六〕 假借　最後に假借(かしや)に至ると、これは漢字を全く或る音を示すために、丁度假名かロオマ字のやうに使つた場合で、例へばアメリカ・イギリスなどに、「亞米利加」「英吉利」と漢字をあてゝゐる如く、文字と意味とは全く關係がない。卽ち借り用ひた漢字の用法といふ意味である。これは支那で、專ら外國の地名人名などの音を寫す必要から生じた用法で、古くから「佛陀」「達磨」「涅槃」等のやうに用ひられてゐる。

以上少し長くなつたが、支那の文字に就いて、如何に目ことばがだんだん繪としての獨立性を失つて、意味のある音を示すたゞの記號となり、更に轉じては假借の場合の如く、意味にも無關係に音だけを示すものと成り下つたかの事情を述べた。それによつて文字とは何であるか、といふことも明かになつたと思ふ。

ついでに『文字』といふ、その『文』とは象形指事の如き獨立の符號を指したもの、『字』とはそれらを二つ以上よせて造つた、複合性のものをいつたものである。

四　口ことばの機構

ところで次に、然らばその文字の主體となつた、口ことばとはどんなものか、といふことが考へられなければならない。

今日通常『ことば』といへば、直ちに口で音聲として發し、耳で聞く口ことばを指すものと解せられる。それ程に口ことばがことばの中の、主要なものとなつてゐる。今日でも方角や形態などを表すときは、或は手眞似をし、目顔の表情を添えなどして、口ことばの足しにするところを見れば、口ことばだけでは物足りないところも、正しくあるのだが、それらは臨時の補足で、ことばの主要なものは、やはり口でだす音聲に意味を宿したものといふことになる。

〔一〕呼吸器　口のことばが、出る息をその原料とすることは、既に述べたが、その息の出され工合を知るためには、呼吸の道具だてをざつと目に浮べて置く必要がある。

先づこの道具だてやからくりを極く簡單にハツキリと想像して見るために、近頃自分はいつも、四斗樽一つ、饅頭笠一つ、空氣枕が二つ、それから醫者の使ふ聽診器一つと、これだけのものを使つて說明することにしてゐる。で、いまもその說明の樣式を使つて話をつづけよう。

さて四斗樽は我々の下腹、つまり胃腸などの收まつてゐる容器で、その上に饅頭笠がかぶさつてゐると想像する。その饅頭笠は卽ち、我々の胸と腹の仕切りとなつてゐる『橫膈膜』のつもりである。それからその饅頭笠の上には、差當りいまの話に必要なものとしては、先に言つた空氣枕が二つ、空氣で脹らんで　左右に分れて載つてゐる。これが

我々の『肺臟』のつもりである。

最後にもう一つ聽診器であるが、これはあの象牙製の二股に分れた筒の部分のラッパ形の口を上へ向け、それから長くぶら下る二本のゴム管を、一本宛先刻の左右の空氣枕の口へ挿込むことにする。實はゴム管はそれ程長い必要はないから、なるべく根元まで押込んでしまふ方が、まとまりが宜い。その代り聽診器のラッパは、もつと長いと思はなければならない。その長いラッパの部分が我々の『氣管』にあたり、その二股に分れて、空氣枕の肺臟へ通じる部分が、『氣管支』にあたるわけである。

以上によつて大體我々の呼吸器の裝置が、諸君の心の眼に浮んだと思ふ。ところで例の饅頭笠の橫膈膜は、自然に收縮して下の四斗樽、卽ち腸を押す。すると腸が押附けられただけ、胸の方に空地が出來て、そこへ外から例の聽診器の氣管と氣管支を通つて、空氣が二つの空氣枕、つまり肺臟へ流れ込む。これが卽ち、呼吸のはたらきの中、吸ふ方の作用である。はたらきとは言つても、これはわざとするのではなく、橫膈膜の收縮に伴つて自然に起る現象にほかならない。

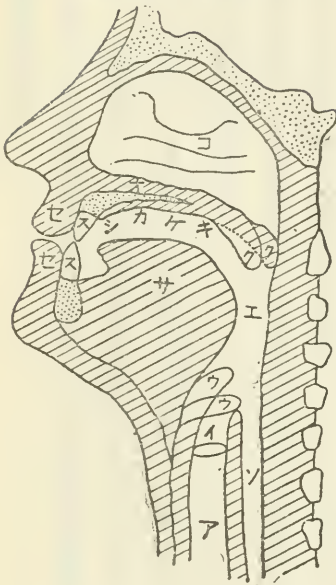
さて、この吸ふ作用がある程度までつづくと、その間、饅頭笠に押附けられてゐた彈力性のある腸が、再びもとの狀態に返るために、今度は下から、橫膈膜を押上げる。すると橫膈膜は收縮以前の位置に戻り、胸の內部はそれだけ狹くなる。同時に空氣枕も押されるからその中へ外から入つて來た空氣を、もう一度先の道を通つて、外へ出さねばならなくなる。これが呼吸の二つの中の、吐く息である。そしてこの作用が或る程度に行はれると、また饅頭笠の收縮がはじまるわけである。

たゞ時々、この横膈膜に悪い癖がついて、その運動の中途で、發作的に收縮することがある。それが所謂、『シャックリ』である。通例これは、お茶を一杯のむ程の間に順調に復する。しかしこれはまた、いはゆる『どもり』の一つの原因ともなるものである。

また婦人に胎兒があつて、そのために横膈膜の運動が妨げられる場合とか、ランニングの選手が競技の直後、非常に多量の空氣を要する場合とかに、胸を擴げて肺の吸氣作用を助けることがある。俗にこれを『肩の息』といふ。

これでざつと、呼吸器及びその呼吸作用が明かになつたとして、次には呼吸中の吐く息が、我々の口ことばの原料として使はれるには、それをば音聲に仕立てる仕掛けが別にある。それをもう少し話さなければならない。

〔二〕 **發音機關** さて、いまの話で、聽診器のラッパを長くして、上に向けたやうだと言つた、その『氣管』の、一番上にあたるところを『喉頭』といふ。これが、普通に言ふ『喉笛』で、つまり一種の發音裝置である。この喉笛の中には一つの唇のやうなものがある。但し、上下に開いたり閉ぢたりするのでなく、左右に開閉する唇で、これを普通、

發音の諸機關

ア 氣管
イ 聲帶
ウ 氣管の蓋
エ 口のつきあたり
オ うはあご
カ 硬い上顎
キ 軟かい上顎
ク のどまめ
ケ 口の洞穴
コ 鼻の洞穴
サ 舌
シ 上前歯のはぐき
ス 上下の前歯
セ 上下の唇
ソ 食道

『聲帶』と稱んでゐる。

ところで我々が、たゞ呼吸するときには、この『聲帶』の闕門は、全く開いてゐて、そこから『いき』が出入するのであるが、その闕門、いはゆる聲門を輕く左右から合せて置いて、それを肺から送り出す『いき』が、押し開けて通らうとすると、そのとき聲帶、卽ち喉笛の左右の唇が、相觸れて或る音を出す。これがつまり『こゑ』であつて、『いき』とは區別される。肺臟から送り出された空氣が、『喉笛』まで來たとき、そこの聲門が開けつ放しになつてゐれば、その空氣はそのまゝ、口のほら穴か又は、鼻のほら穴へ行つて、『いき』のまゝで出てしまふ。處が『喉笛』の聲門が、輕く閉まつてゐると、そこを押し開けて通りながら、その扉のやうな『聲帶』に、或る鼓動を起す。この鼓動が、謂はゞその『いき』を一種の色で染めるやうなもので、その染まつた、色の着いた『いき』が卽ち『こゑ』となるわけである。

此處でついでに一言して置きたいのは、例の、內證話などに使ふ、『ささやき』といふものである。あれは元來聲門を閉ぢて置いて出すべき聲を、約半分開けて出す、すると兩方の扉卽ち聲帶が十分に鼓動しないから、あのささやきになるので、風邪のために聲がつぶれたといふのも、やはり同樣、合ふべき聲帶に隙間が出來るのによるのである。

さて、肺から出た空氣、卽ち『いき』は、『いき』のまゝにせよ、又色が着いて『こゑ』となつたにせよ、どのみち體外へ、送り出されるのであるが、その出てゆく道筋はといふと、それは口からか、又は鼻からか、或はその兩方からである。そこで『いき』又は『こゑ』を、口からばかり出すには、鼻の方へ行く路を止める仕掛がなければならぬ。鏡に向つて口を大きく開いて見ると、口の奥の眞ん中の所に、赤いつららのやうなものが下がつてゐる。このつららが、丁度鐵道の線路の分れる場所で、轉轍手が、線路の分岐部を左によせ、右によせするやうに、『いき』や『こゑ』の、或は

鼻の方へ、或は口の方へ行く通路を、止めたり、通じたりするのである。

これで一と通り、口ことばの基になる聲音を作る、道具だてを述べた。次には愈々その個々の聲音に就いて說明しなければならない。

五　聲音の話

〔一〕鼻音と母音　先づ例の肉のつらら、即ちのどまめをだらりと下げておいて、唇を結び、その上で、喉笛から來た『こゑ』を、鼻へ送り、鼻のほら穴に響かせて外へ出す。すると、それはマミムメモの基になつてゐる「ム」〔m〕の音になる。次に唇を結ぶ代りに、舌の端を、上齒の齒ぐきの後方にあて、そこで音をせき止めて、前と同樣、『こゑ』を鼻のほら穴に響かせる。するとナニヌネノの基の「ヌ」〔n〕の音が出來る。もう一つ、舌の背を上顎の奥に當てて、それによつて音の口から洩れるのを止めて置いて、『こゑ』を鼻に響かせると、それがンガ・ンギ・ング・ンゲ・ンゴ、の「グ」〔ŋ〕の音になる。なほこれに、後に述べる父音の〔j〕を加味したものを基として『ギャ・ギュ・ギョ』の音も成立つのである。以上三つの音を鼻音といふ。

さて次には、口のほら穴で出來る『母音』である。これは鼻の方へ響かない音で、つまり例ののどまめを、口の突き當りへ、ぴつたりあてゝ、『こゑ』の鼻の方へ行く路をふさいで、口からばかり『こゑ』を出すのである。さうしてその『こゑ』を出すときに、口を大きくしたり、小さくしたり、舌を平にしたり中高(なかだか)にしたりすることによつて、いろいろな音を出すのである。

先づ口を大きく開き、舌を平にして唇をOの字を横にしたやうに擴げて、『聲』を口の空洞に響かせて出す。すると『アー』の音が出る。次に『イー』は、口の開きかたが大いに狭くなつて、舌の前の部分は、上顎の前の方に段々高く上がり、唇の兩隅は左右へ開いて來る。さうして置いて出す聲が、『イー』となる。

それから『ウー』は、どうであるか。口の開きかたは、前の『イー』と同じやうに狭く、たゞ舌が『イー』の場合とちがつて、前の方へ上がる代りに、上顎の奥の方へ上がる。さうして唇は、『イー』のときのやうに左右へ吊らずに、丸くつぼめられる。そして聲を出すと、『ウー』である。但し、短かく『ウ』とだけの場合には、『ウー』と長く出すときよりは、唇のつぼめ方が、幾分少い。

さて、いま述べた『アー』『イー』『ウー』の出しかたが、ハツキリ解ると、あとの『エー』『オー』は、もう解り易い。で、此處に簡單な圖を示して、理解のたすけとしようと思ふ(次頁の圖參照)。但し以上說明の便宜上『アー』『イー』などと、長く發音したが、同じ方法で、『ア』『イ』と短かくも出せることは無論である。

次の圖をよく見ると分る通り、『エ』の音は、『イ』と『ア』との中程で出來る音で、つまり舌が『ア』から少しづゝ『イ』の方へ近寄つて行く中途の所で、聲を出すと『エ』になるわけである。また同樣に舌が、『オ』は『ア』から『ウ』へ近寄つて行く中途で、『ウ』に似て、それ程強くない音が、『オ』となる。その唇の開き工合、舌の位置なども、次の圖によつて知つてほしい。

〔二〕 母音の種々相　もう一つ、次の圖の中に『前母音』『後母音』といふ分類がある。それを說明すると、一體、母音、卽ち口の空洞に響く『こゑ』の、或は『ア』となり、或は『イ』となり、その他『ウ』『エ』『オ』などと、種々になる

のは、既に言つた通り、(一)顎の開き工合と、(二)舌の上下及び前後の運動と、(三)唇の丸さ平たさと、この三つの關係によるわけである。そこで『アー・エー・イー』と、續けて言つて見ると、舌は『ア』より『エ』に、また『エ』より『イ』に、次第に前方へ昇り、唇は次第に平たくなることが分る。で、『エ』及び『イ』などは、「ア」を基點として、それより舌が前方に位置して出る母音、といふ意味で『前母音』と名づける。これに反して、今度は『アー・オー・ウー』とやつてみると、この場合は、舌はだんだん後方に引かれて、唇は次第に丸くなる。だから前と同じ意味に於て、『オ』『ウ』の如き母音を、『後母音』と呼ぶのである。

　但し、この後母音の中『ウ』は、我が國では普通、殆んど唇を動かさずに出される。『ウナギ』などといふときの『ウ』である。それゆゑ日本人には、西洋のことばのあの唇を丸くして突きだす〔u〕の音は、練習をしないとむづかしいのである。

ついでに、その西洋流の『ウ』〔u〕の練習には、湯呑みに熱い湯を入れて、それを吹きながら呑む、あの吹きさますときの口の形を作り、その口つきで『ウ』と出してみるのが、最もよい。一體同じ日本でも、關東方面の人々は長母音を出すとき、割合に唇を圓くする傾向が多い。つまり、西洋式に近いのであるが、東北方面の人々は、どうも、唇を動かさない。東北人の『數學』と言ふのが、『スィーガク』と聞こえるのは、そのためである。

なほ、同じ母音が『アー』『ア』『イー』『イ』といふ工合に、長くも短かくも發音されることは既に述べたが、此處にたゞの長短以外の、もう一つの問題がある。それは、或る母音を出すとき、舌の專ら使はれる部分に、『凝り』が出來ると出來ないとの相違である。これは、その音の長短といふ事とは別に、音の性質の相違の一箇條になるのである。

例へば、同じ『イ』といふ母音を出すのに、舌に力を籠めても言へるし、籠めなくても言へる。力を籠めれば、舌に『凝り』が出來るわけである。そしてそれは『イー』と長く言ふときでも同じで、やはり舌に力を籠めて重くも、力を籠めずに輕くも言へる。

假りに何の氣なしに『アイウエオ』と言ふときと、『アッ・イッ・ウッ・エッ・オッ』といふ風に、ことさら力を入れて言ふときとは、その音の性質が違ふのである。卽ち後者の、舌に力の入つた場合は、舌の、それぞれ必要な部分に、小さいながらも『凝り』が出來て、それだけその部分と上顎との距離が狹くなるからである。これは、自分でも殆んど氣の付かぬ程の、些細な差違のやうではあるが、ことばといふ器を大切にする上からは、注意されなければならない。

イギリス語では、短母音には舌の『凝り』がなくて、長い母音にだけ『凝り』がある。卽ち『あんばいが惡い』といふ "ill" の「イ」のときは『凝り』がないし、『うなぎ』 "eel" の「イー」のときは『凝り』がある。またフランス語の『イ』に

は、短かくても『凝り』がある。では日本ではどうかといふと、我が國では、母音の長短どちらにも、力を入れたのも入れないのも使ふ。たゞ普通の場合の發音には、力を入れない。卽ち舌に『凝り』のないものが、用ひられてゐることは、すこし注意すれは、容易に知れる。

次に、もう一つ、母音の出しかたに就いて、注意すべきことがある。

すべて聲を出すには、聲帶を左右から輕く寄せ合せて置いて、それを下から息で押し開けるのであることは、前に述べた通りであるが、いま、一つの母音を發音するとして、その際、聲帶を、豫め先づ適度に寄せ合せて置いてからその母音を出すのと、その母音を出しながら漸次に聲帶を寄せるのとでは、同じ母音の明瞭の度が違ふのである。つまり、豫めちやんと聲帶を寄せ合せて置いてから、出した母音は、ハツキリした音になるし、聲帶を閉ぢながら出した母音は、頭のぼやけた音になるわけで、これは殊に多數の聽衆を相手に話をする人々、歌をうたふ人などの、充分注意すべきところである。例へば『カンイチ』といふ名前を、ハツキリ言ふには、その『イ』の前に一度出直して、聲帶を閉ぢてから、それを出さねばならない。さうしないと、『カンニチ』となるものである。但し、一つ母音が、ハツキリ發音されねばならぬといふことを表示するためには、その母音を示す符號又は文字の前に、疑問記號の上半に似た(ʔ)かういふしるしを附けるのが、萬國發音學協會のきまりになつてゐる。

それから母音の、高低と大小との相違といふことも、一應知つて置かなければならない。

母音の大小、つまり聲の大小といふのは、その音を出すために用ひる息の量の大小であるし、母音の高低といふのは、それを出すときの聲帶の振動の回數の差違である。

また、同じ母音でも、ことばとして他の音の中に混つて發音されるときには、その隣り近所の音の影響を受けるといふことも起る。例へばアイウエオが鼻音に取り卷かれると、それは鼻音化する。『門前の小僧習はぬ經を讀む』の『モンゼン』の中で、『オ』の音は、自然鼻にかかり、つまり鼻音化してゐるのである。

ところが、かういふ鼻音化は、周圍の音の影響によつて起るのであるが、元來、聲の鼻へ出る路を塞いで、その聲を口にばかり響かせるはずの母音を、鼻への路をのどまめがしつかり塞がず、隨つてその聲が幾分鼻へ洩れると、そこに所謂、鼻にかかつた聲が出る。『裏通りは道が惡い』を、『うナどほニは、道がゐヌい』といふやうな聲である。

また反對に、風邪にかゝつて鼻がつまつた場合には、のどまめを垂れても、聲が鼻へ拔けることが出來ない。すると、鼻へ聲を響かせるはずの鼻音を基とする、『マミムメモ』や『ナニヌネノ』などの音を出すのが、困難になる。この場合に出るのが、いはゆる鼻つまりの聲で、『雨が降つて道が惡いのは、止むを得まい』といふのが、『あべが降つてビちがわドゥいドは、やブを得ダい』といふ風になる。

〔三〕 **話音の分類**　我々の口ことばの原料は、我々の吐く息であると、はじめに言つたが、その原料の『いき』が、以上說明した發音機關によつて、種々な色を着けられて、音聲となつて、はじめて我々の思想感情を傳へるに使はれてゐるのである。ことばに使ふ音聲を、『話音』と名づけるのもその爲である。

この『話音』を、その性質によつて大別すると、(一)『ひゞき』と、(二)『おと』との二つに分れる。『ひゞき』は例へば、鐘の響のやうなもので、何かの中に反響する音である。それに對して『おと』といふのは、例へば物の破裂する音、拍子木を叩くやうな音、或は物の軋む音、即ち『スーッ』とか『ズーッ』とかいふやうな音などである。

そこでいままで發音機關の話と共に說明した『鼻音』と『母音』とが、此處に言ふ第一類の『ひゞき』である。それでは第二類の『おと』とはどんなものかといふと、これが世に謂ふ『父音』(又は『子音』)である。

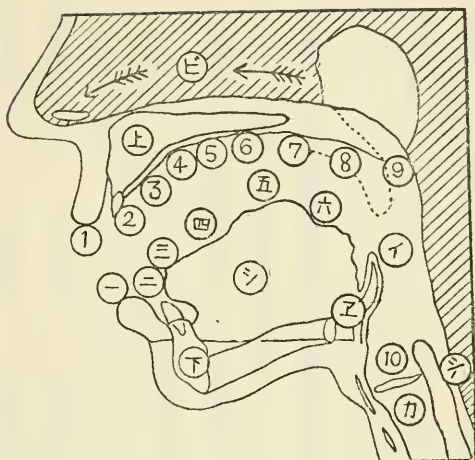
一體我が國で常識的に、『アイウエオ』を母音、『カキクケコ』以下を皆父音、と考へてゐるのは間違ひで、例へば、『カキクケコ』は、「ク」〔k〕といふ『おと』と、『アイウエオ』のやうな『ひゞき』とが合して出來てゐる音なのである。で、その〔k〕こそ本當の意味の『父音』である。

さて、『おと』すなはち『父音』にはまた、『いき』で拵へるものと、『こゑ』で拵へるものとの二種がある。そしてその『いき』で拵へたものが『淸音』で、『こゑ』で拵へたものが『濁音』である。但し日本では『パピプペポ』を、一般に『半濁音』と稱んでゐるが、その『パピプペポ』の基になつてゐる父音「プ」〔p〕は、全くの淸音、卽ち『いき』だけで作る音である。それを『半濁音』などと呼び慣はしたのには、歷史的な原因があるが、それはまた、後に述べる機會があらう。

更にまた、いま述べた『おと』を、耳に聞える工合から分けると、(一)『軋む音』と、(二)『破裂の音』との二種になる。『軋む音』といふのは、例へば『スーッ』とか。『ズーッ』とかいふ風な音である。また『破裂の音』とは、『ガッ』とか、『ダッ』とか、『ペッ』とかいふ類の音をいふ。

〔四〕父音の說明　これから一通り、父音に就いて說明するが、先づ次の圖をよく覽ておいてほしい。

先づ上下の唇を使つて作るのに次の音がある。

(1)鼻音の「ム」〔m〕がある。これは『ひゞき』であつて、『父音』とは區別されねばならぬことは、前に述べたが、普通には『父音』とか『子音』とかいふ類に入れてゐるから、ついでに此處に、その成立ちを示すことにしたのである。これ

1上唇　2上前齒　3同齒莖　4硬い上顎の前部
5同中部　6同後部　7軟い上顎の前部　8同後部
9のどまめ　10聲門(聲帶のあふ所)　一、下唇
二、舌の尖舌　三、舌の前部の面　四、舌の中部の面
五、舌の後部(奥)の面　六、舌の根(盲孔部)
ビ、鼻の洞穴　上、上顎骨　下、下顎骨　カ、喉頭
イ、咽頭　シ、舌　エ、會厭　シ、食道

注意。以下「ム」「プ」「ブ」「ズ」等、片假名の右肩に半月形を添えたものは、それぞれの假名の示す音から「母音の部分を除いたもの」といふ意味を表す。

は、我が『マミムメモ』の基となることも既に述べた。

同じく上下の唇で、即ち圖によつて言へば(1)と(一)とで出來る破裂の音が二つある。

(2)「プ」〔p〕　これは我が『パピプペポ』の基を成す音で、兩唇を全く閉ぢて置いて、そこに止めた息を唇を開くと共に、「プ」と出す清音、即ち『いき』だけで作る音である。『パピプ』の『プ』は『こゑ』を伴つてゐるが、つまりあれから母音の『ウ』の要素を除いたものが、この「プ」である。

(3)「ブ」〔b〕　これは上下の唇と『こゑ』とで作る音、すなはち濁音で、我が『バビブベボ』の基となる音である。

(4)『フ』〔F〕　次にもう一つ、上下の唇を少しほころばせて置いてその間から『いき』を洩らすと、我が國の『ハヒフヘホ』の『フ』の基になる清音が出來る。これは、外國語の〔f〕の音によく似てはゐるが、少し違ふ。それは次の項を讀んで了解されたい。この音を表すために、萬國發音學協會では、花文字のFを、小さく書くことに定めてゐる。

圖の(2)と(一)、つまり上の前齒と下の唇で出來る、軋(きし)みの音が〔f〕と〔v〕である。

(5)〔f〕これが前項で述べた「フ」に似た音で、「フ」は上下の唇の間から息の洩れる音であるのに對して、これは上の前齒を下の唇にあてて、その間から『いき』を洩らして作る。これもやはり清音である。『ローマ字』で我が『フ』の音を寫すに、fとuを以てするのは、たゞ比較的近い音を示す文字であるからである。

(6)「ヴ」〔v〕いまの〔f〕の音を『こゑ』で出したものが、この〔v〕の音である。やはり軋む音であるが、〔f〕が清音であるに對して、〔v〕は濁音である。これも我が國では從來用ひられなかつた音であるが、近來、外國傳來の語を寫すに、『ヷヸヴヹヺ』のやうな假名が用ひられるに至つた、それらの基を成す音である。

(7)〔θ〕(8)〔ð〕この二つの音は、いづれも(2)と(二)で、すなはち上の前齒に舌の端をあてて、その間から前者は『いき』を、後者はそれに『こゑ』を洩らして作る音である。隨つて前者は清音、後者は濁音で、兩者とも軋む音であることは、同じである。しかしこの二つは日本語で全く使はれないと言つて宜い。

次に(3)と(三)とで作られる音は澤山ある。先づ鼻音を擧げる。

(9)「ン」〔n〕が、上の齒莖に舌の前部をあてて置いて、『こゑ』を鼻に響かせる音で、また『ナニヌネノ』の基の音であることは、前に述べた。

(10)〔t〕これがやはり、上の齒莖に舌の前部をあてて、そこに喰ひ止めた『いき』を、舌を放すと共に洩らす破裂の音。やはり清音で『タチツテト』の基である。但し『チ』と『ツ』の二つには、後に述べる〔ʃ〕及び〔s〕の音が加味される。

(11)〔d〕〔t〕と同じ作りかたで、『こゑ』で作られたのがこの〔d〕で、隨つてこれは破裂の濁音である。『ダヂヅデド』の

うち『ダデド』の三つの基になる音で、『ヂ』と『ヅ』には、後に述べる〔ʒ〕の分子と、〔z〕の分子とが、それぞれ加はつてゐるのである。

(12) 「ル」〔r〕 これも詳しく言へば「ル」と〔r〕とは、大いに違ふのである。「心」の方は、上の齒莖に舌の前部を輕く當てて、その間から聲を洩らす濁音、それが我が國の『ラリルレロ』の基を成す。〔r〕の方は、舌が上顎に着かずに、前後に煽つて出來るのである。

(13) 「ス」〔s〕 これは『サスセソ』の基を成す清音で、また軋みの音。舌の前部はやゝ銳角に、ぴたりと上の齒莖にあたり、その間を息が洩れるのである。但し『サシスセソ』中『シ』の音だけは、後に述べる〔ʃ〕を基とする。なほ『タチツテト』の『ツ』の基は、〔t〕にこの〔s〕の加味されたものである。

(14) 「ズ」〔z〕 いまの〔s〕の音に聲で出して濁音としたものが、これである。『ザズゼゾ』の基を成す、やはり軋む音の一つ。たゞし『ジ』は、後に述べる〔ʒ〕の音に似たものである。

前に述べた〔d〕の音に、この〔z〕の加味されたものが、『ダヂヅデド』の『ヅ』である。

(15) 「シュ」〔ʃ〕 これも、(3)と(三)によつて作られる清音で、我が『シャ・シ・シュ・シェ・ショ』の五音の基を成す軋みの音である。前に(13)スの音のところで、『サシスセソ』の『シ』だけは、「ス」の音を基とせぬ、と言つて置いた。その『シ』の基は略ぼこれと言つても宜からう。また『タチツ』の『チ』の音は〔t〕音にこの〔ʃ〕の加味されたものを基とする。この音の作りかたは、唇をやゝ圓めぎみに突きだして、舌の前部を、〔s〕の時よりやゝ奥へ引込めて上の齒莖に平らに近寄せ、その間から『いき』を軋ませて出すのである。

(16)「ジュ」〔ʒ〕 前の〔ʃ〕の口形で、『いき』の代りに『こゑ』を軋ませると、この音になる。軋みの濁音である。『ザジズゼゾ』の『ジ』の音は、これ程に唇を突き出さず、平たい唇で出されるが、まづ略〻同じと言へる。

なほ前に(11)〔d〕の音のところで、『ダヂヅデド』の『ヂ』の音の基の父音の説明を、預かつて置いたが、その『ヂ』の基となるのは、あの〔d〕に、この〔ʒ〕が加味された、〔dʒ〕なのである。

それから、もう一つ、これは我が國では殆んど使はれないとされてゐるが、外國語には絶えず出てくる、そしてやはり、圖の(3)と(三)の部分で出來る音がある。それをあげる。

(17)「る」〔l〕 これである。我が『ル』の音に似て、もつと軟い、なめらかな音で、先づ舌の前部を上の齒莖へあて、舌の左右の縁は口中の他の部分に觸れないやうにして置いて、その兩側を通つて聲が出るやうにする。我々日本人にはむづかしい音であるが、外國語が盛んに輸入される今日、かういふ音の存在を知らないと不都合な場合も少くあるまい。現に年少の生徒の間には、この〔l〕の音を『ウ』と聞きちがへる者も屢〻ある。

(18)「イ」〔j〕 次に(5)と(四)、卽ち硬い上顎の眞中邊と、舌の中部との間から『こゑ』を洩らすと、それが我が『ヤイユエヨ』中の『ヤユヨ』の基を成す濁音になる。これは本來、軋みの音であるが、日本語では、その軋む程度が極く少く、隨つて、この父音の影が薄くなつて、母音だけのやうに聞こえる。つまり『イァ・イゥ・イォ』といふ風にである。なほ日本で普通「拗音」といはれる音にはこの〔j〕の加味されたものを云ふのである。

(19)「ヒ」〔ç〕 いまの〔j〕の口から、『こゑ』の代りに『いき』を洩らすと、ちよつと『ヒ』に似た淸音、卽ち『いき』だけの音が出る。ドイツ語によくある音で、日本語でも『ヒト(人)』『アサヒ(朝日)』などといふときの『ヒ』は實はこれなの

である。これらの場合の「ヒ」を『ハヒフヘホ』の中の『ヒ』と同じだと思ふのは本當でない。

次には(7)と(五)、卽ち軟かい(奥の)上顎と舌の奥とで出來る音がある。先づ鼻音をあげる。

(20)「グ」〔ŋ〕がそれである。舌の奥を上顎の奥にあて、それで音の口から洩れるのを止めて、『こゑ』を鼻へ響かせたものが、これであることは前に述べた。次に父音をあげる。

(21)「ク」〔k〕がある。これはやはり舌の奥と上顎の奥とでせき止めた『いき』を、鼻へも洩れないやうにして、置いて、急に口の方へ開放する、破裂の音で、我が『カキクケコ』の基となる淸音である。

(22)「グ」〔g〕いまの〔k〕の濁音、すなはち開放する『いき』を『こゑ』に變へたものがこれで、やはり破裂音である。我が『ガギグゲゴ』の基をなす。

(23)〔w〕これは、唇をまるくして突出し、舌の奥を高くして上顎に近づけ、舌の背と唇と二個所に、聲を軋ませて出すので、我が『ワヰヱヲ』は、この音を基としたはずなのだが、今日ではその中、『ヰヱヲ』は、假名遣ひの上ではともかく、發音上では殆んど、『イエオ』と區別されないから、僅かに『ワ』だけに、この音の殘りを認めるに過ぎない。なほこの音を息だけで出した、卽ち淸音〔ʍ〕もあるが、これは我が國では使はれてゐない。

(24)「ハ」〔h〕最後に(10)の聲門で出來る軋みの音が一つある。口の形は全く母音の『ア』を出すときと同じにして置いて、肺臟から急に送り出した息を、聞いた聲門の兩扉に軋ませた音で、『ハヒヘホ』の基をなす淸音である。

さて以上で、簡單ながら我々の口ことばに用ひる聲音の一と通りを、鼻音と母音と父音とに分けて說明した。それも主として我々の國語、日本語といふものを中心にして、日本語の基礎となる聲音が、如何にして作られるかを述べ

父音分類表

	I	II	III	IV	V	VI	VII
	1+一	2+一	2+二	3+三	5+四	7+五	10
鼻音	ム) 〔m〕			ン) 〔n〕		ク) 〔ŋ〕	
破裂音	プ) ブ) 〔p〕〔b〕			トゥ) ドゥ) 〔t〕〔d〕		ク) グ) 〔k〕〔g〕	
軋む音		フ) ヴ) 〔f〕〔v〕	〔θ〕〔ð〕	ル) 〔r〕 ス) ズ) 〔s〕〔z〕 シュ) ジュ) 〔ʃ〕〔ʒ〕 る) 〔l〕	ヒ) ユ) 〔ç〕〔j〕		ハ) 〔h〕

た。これだけ知るといふことが、既に我々をそれだけ國語、殊に口で話され、耳で聞かれる生きた國語に對して意識的に、敏感にすることは言ふまでもない。さうしてそれがまた自分の、斯くことば、國語といふものに就いて長々と述べた目的でもあつたのである。

六　ことばの發達

では次に、言語の發達といふことを考へて、それから、續いて國語陶冶の問題に觸れてみよう。

我々のことば（卽ち口ことば、以下普通の用語の例に隨つて、口ことばを單にことばと言ふ）が、兩親及び周圍の人々のそれを、眞似ることによつて自然に習得されるものであることは、はじめに、述べた。ところでこの『周圍』といふ

のは、考へやうによつて、我々の家庭といふ風に狹くも、また我々の住む村とか町とかいふ風に、やゝ廣くも考へることが出來るが、それを我々のことばに或る特色を與へる條件として考へてみると、我々の使ふことばは略〻次のやうな條件によつて左右されるものであることが知れる。

〔一〕**地方的差別**　或る地方に居住する人々の間に、その地方特有のことばが使はれ、同じ單語にしてもその調子が、他の地方の人々の言ふのとは異り、甚しきは聲音のだしかたさへちがふ場合のあることは、既に發音機關の話のところでも一二の例をあげて置いた。で、この地方的な差別といふものは、最も著しいもので、一般に『地方語』といふものがこれである。要するに或る地方の數家族、又は數十家族の間で、互に直接の交渉を重ねるうちに、相互の默契により、また互に眞似合ふことによつて、或る口の利きかたが定まり、それが、子孫の間に傳はりひろまつたもので、それが或る程度まで保存されるのには、一方に交通の困難といふこともあつて、他の地方の人々と直接話すやうなことが滅多にない時代に、いよいよこの地方的差別はハツキリした形を取つて流布して行くのである。

〔二〕**階級的差別**　次にまた人のことばは、その人及び彼の屬する家族の、社會的な地位によつて差別を生ずる。例へば富裕な家の子は、貧しい家の子とは、幾分異つたことばを使ふ。これは勿論前に述べた方言、即ち地方的差別の中に生ずる現象ともいへるので、つまり同じ地方の方言の中にも、地主階級のことばと小作人階級のことばとが自然別れるといふ風なものである。

〔三〕**職業的差別**　更にまた人の職業の別は、自らその職業に特有のことば遣ひを生じるものである。例へば醫者には醫者らしいことばが、農夫には農夫らしいことばが使はれる。これははじめにあげた地方的差別をも、超越するも

いふ工合である。

以上は、ことばの差別を生ずる條件の主なるものであるが、何といつても、地方的差別が最も根本的なものであることは、勿論である。そこではじめは、さういふ地方的なことば、即ち方言が各地にあつて、それぞれの範圍で用ひられてゐる。そのうちに或る地方の方言を用ひてゐた人々が政治上・社會上に勢力を得るやうになると、その人々の使ふことばは、一般の眼から見ると、自然一層優れたことばと見られもし、又それを使ふ人々の地位の向上から自然そのことばは、洗練されて、一種の『上流社會のことば』ともいふべきものとなる。これはまだ文字の使用を知らない時代の、原始的な社會に於てさへ、例へば酋長及びその一族郎黨のことばが中心となるといふ風にして、多少は必ず起ることであるが、その民族が一旦文字の使用を知るに及べば、政治的社會的中心となる階級のことばは、文字によつて記錄されて、そこに自然『正しいことば』の標準が確立されるわけになる。

假りに次の時代には、他の地方から他の方言を有つた人々が政權を握るやうなことがあつても、記錄されたことばは或る程度まで、その新しい上流社會にも繼承され、更に一層の洗練を受けるといふ風で、かくして我々は今日、一般に敎育ある日本人が、誰も彼も使ふ日本語の一形式を有つに到つた、これが所謂『標準語』といふものである。

たゞ此處に注意すべきことは、『方言』といふものは決して、それ自身卑しむべきものではないことである。純粹な方言は寧ろ、學問上の見地からいつても、貴重なもので、或る學者の如きは、不完全な標準語、つまりぬえのやうな聞きかぢりのことばを話すよりも、純粹な方言が貴いと言つてゐる位である。たゞその方言を、標準語となつたこと

ばに對抗するものでもあるやうに考へて、標準語を使はずに方言を使ふことを主張したり、自分の地方のかくかくの方言的語句は、かかる古語から來たものだから、標準語のそれに當ることばよりも上品である、などといふのは幾分見當ちがひの議論といはねばならぬ。

七　標準語と國語

以上簡單ながら標準語といふものの成立ちを述べたが、然らばその標準語といふものは我が國語の中に、既に完全な形式として確立されてゐるか、といふとなかなかさうでない。

元來ことばといふものは、何時如何なる世のことばでも、固定したものではなく、例へば元始的な方言にしても、それを使ふ人々の思想風俗の變遷とともに、常に推移してゆくものである。ことばが生きたものであると言はれるのは、他にも理由があらうが、一つはこの事相を言つたもので、隨つて現在の我々の標準語にしても、決して完成された、固定したものではない。寧ろ標準語とは『標準化されつゝあることば』といふことである。

前にも述べた通り、政治的中心地に於て、比較的優越な地位にある階級に使はれることによつて、やがてその政治的勢力の及ぼす總ての地域に、共通に用ひられることばとして標準化されたものが標準語であるが、それはさうなりながら、またその中心階級及びそれに直接接觸する人々の、必ず享有する一層高い教養によつて、愈々洗練を加へられ、また一方文學上その他にも用ひられて益々、微妙な思想感情を表現し得るやうに開拓されてゆく。

かういふことは、慥かに標準語の發達であつて、誠に喜ぶべきことではあるが、此處に一つ省みられねばならない

ことは、さういふ標準語の發達と一般國語との關係である。國語といふものは、その國民の精神を內からしつかりと結びつけて、國家意識を緊密にする最も大切な綱である。我が國にも古來『言靈』といふやうな語があり、古代ギリシヤにも、『ロゴス』といふ語には『ことば』といふ意味と『理性』といふ意味とが含ませられてゐた。かういふことは、如何に人間が『ことば』といふものを太古から尊重したかといふことを物語るのである。卽ち國語の完全な發達・疏通といふことは、直ちにその國、その國民の强大といふことを意味するとも言へるのである。

然らばその國語の發達といふことは、前に述べた標準語の發達、洗練といふことから、自然に招致されると考へて置いて宜いであらうか。卽ち標準語は或る意味に於ては自然より洗練され、美化されてゆくとも考へられるが、一般國語も亦それに伴つて、放つて置いても發達してゆくことを望み得るであらうか。

八　國語陶冶の意義

或る程度までそれは、望み得られるとも言へよう。今日標準語で書かれた語句文章は、全國の津々浦々で讀まれ、それはそれだけ國語の標準化を助けてゐるに相違ない。普通教育・中等教育に携はる教員諸氏の努力と貢獻とに就いては、今更らしく言ふまでもない。すべてこれらは、國語の標準化、詳しく言へば、一般國語が標準語の洗練され美化された狀態に高められてゆくことを期待される事情である。

しかし此處にもう一度思ひだされねばならないことは、ことばは本來口から耳へ傳へられるものであつて、文字を通じて目によつて見、さうして理解されるものは、間接な謂はゞことばの影であることとである。

抑も國語の陶冶といふことの、眞の目的を考へてみるに、その一つは國語といふものを前にも述べた通り、國民各自の心と心とを深く強く結び合はせる爲の强固な綱とすることでなくてはならない。一つ地方の住民の間には、一つの方言、その口調等によつて、打てば響くやうな、寸分の隙もない意志や感情の疏通が行はれる。その間に努力もなければ、誤解も曲解もない。さういふ親密な共感理解が、標準語を通じて國民全體の間に成立つことこそ、國語陶冶一つの理想であらう、と私は思ふ。

勿論この外にも國語そのものの美化・淨化等の問題もあるが、それは前にも述べたやうに、主として標準語に對して、それにより以上の磨きをかけることで、つまりさういふことを國語陶冶の奥行を深くする努力とすれば、一般國語の標準化といふ方は、これを、國語陶冶の間口擴張の努力とも言へようか。

から考へると我々は、標準語で綴られた文章を誤りなく理解し得るとか、手紙その他自己の所用の文書を、標準語で書き得るとかいふところで滿足してはならない。まして前にも述べた通り、ことばの本然の姿は口から耳へ傳へられる音聲であり、それには文字を以て表し得ない微妙な明暗も色合もあるのであるから、さういふ點にも注意して國民各自が自己のことばの陶冶に努力しなければならない。つまり我々の國語修養は、一面最も發達し洗練された標準語による文章を讀み味ふと同時に、他面我々が我々自身語り又聞くことばに對して敏感になり、意識的になることによつて、兩面からなされなければならないのである。

九　國語陶冶とラヂオ

さて我が國語中の標準語となりつゝある『東京語』は、江戸地方の方言であつたものが、德川の治世三百年の間、江戸城の外交語として諸大名の間に用ひられて、美化され淨化されて來た上に、更に江戸が、明治の大御代の首府として、日本帝國の中心都市東京となるに及んで、教養ある人々の大多數の居住地となり、そのことばは、恰も此處に咲き出でた口語體の文學によつて、愈〻自在なものとなり、微妙なものとなつて、まつたく現代日本の標準語として、恥しからぬ性能を具備するに至つた。

それと同時に交通の發達、教育の普及は、この中央のことばを津々浦々にまで傳播しつゝある。卽ち東京語はたゞ名のみでなく、次第に本當の標準語としての實を結びつつあるわけである。

しかしその普及傳播といふことも、何分從來の主として文字を通じ眼によつての方法では遺憾の點が多かつた。これは幾度も言つた通りことばの本體が、人の口から耳へ直接傳へられるべき音聲であることを思へば、何人にも直ちに會得されるところであらう。さうして又、この遺憾を救ふ最大の武器として、今日何人にも想起されるものが、ラヂオである。

實際ラヂオこそ國語陶冶の最上の利器である。それは如何なる邊鄙な土地に住む人の耳にも、直接中央の標準語を口づから傳へることが出來、隨つてその文字に表すことの不可能な微妙な明暗までもハツキリと聽取させることが出來る。これは國語の陶冶、惹いては國民の思想感情の統一といふ上からいつて、實に大きな可能性が開けたことであつて、今後國語の陶冶とか、國語の發達とかいふ國語愛護の問題を考へる者は、何人と雖も、ラヂオの國語に及ぼす影響といふことを無視するわけにはいかない。

さて然らば、それ程に我々の國語の發達上に重要な役割を持つラヂオ放送といふことに對して、我々はどんな態度を持つべきであらうか。これは放送者の側と、聽取者の側と、兩方から愼重に考へられねばならないと思ふ。卽ち先づ放送者の方では、自己の用ふることばがマイクロフォーンを通じて、如何に多く人の耳に入り、それが善きにつけ惡しきにつけ、また大なり小なり、國語の發達推移に影響することを考へて、出來得る限り明瞭な發音と正確な語法とを放送するやうに心がくべきは勿論である。たゞしこれはもとより、放送の種目にもよることで、例へば落語の如きものを、その總ての部分に亘つて、上品な論理的なことばに飜譯して放送したら、落語によく出る卑俗な語形の持つ妙味は殆んど失はれてしまふに相違ない。が、少くとも眞面目な講演・童話等に關しては、上述のやうな放送者側の心がけが望ましく、また望み得られるものと信ずる。

それと同時に、一方聽取者の側にもやはり相當な熱心と興味とが必要である。假りに放送者の方に、國語の陶冶といふことに就いての十二分の熱意と努力とが用ひられたとしても、それを聽取者が何氣なく、聞き捨てたのでは折角の立派な放送も結局何の効果もないであらう。且つ實際に於ては、放送者にも言ひちがひもあらうし、語法上の誤りを犯すこともあり得る。また彼の標準語と信じたことばの中に、方言或は卑語が混ぢつてゐることもないとは言へない。さういふ場合にそれを識別し、長を採り短を捨てて、自己のことばの純化を計るだけの眞面目な心構へが、聽取者の側にあつてこそ、ラヂオの國語陶冶に資すべき性能も、はじめて完全に發揮されるといふことが出來る。

なほ前にも述べたやうに、標準語といふものがまだ完成されても、固定してもゐないものなので、それは時代と共に推移してゐるのであるから、現在の標準語を更に美しく、更に正確な、また更に豐富なものにして、それによつて

國民の精神的結束を固くすると同時に、その美化され純化された國語を、次の時代に引繼ぐことが我々の大きな責務でなくてはならない。さうしてその責務を果す上に於て、最も効果的な役割を持つものとしてラヂオを擧げることには、恐らく何人も異議がないであらう。

たゞくれぐれも、そのラヂオの性能を充分に、國語の陶冶と發達との上に發揮せしむると否とは、結局それを利用する人々各自にあるので、要は國民各自が國語に對して敏感になり、意識的になつて、互ひにこの我等の祖國日本の國語を一層美しく、一層完全なものとする爲に力をつくすといふ覺悟がなければならないのである。

正にこの時、我が日本放送協會は、大いにこの點に考慮するところがあつて、昭和九年一月以來、放送用語の調査事業を正式に開始し、その道に精通の人々を委員に擧げ、着々、國語整理を劃ることになつたのは、誠に機宜に適した處置であつて國家の一大慶事である。その大事業の洋々たる前途を祝福して、この蕪雜な一篇を閉ぢる。(完)

昭和九年十月五日印刷
昭和九年十月十日發行

國語科學講座
（第十回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者　株式會社　明治書院
代表者　三樹退三

東京市神田區三崎町二丁目一番地
印刷者　株式會社明章印刷所
代表者　細谷祐三

發行所　東京市神田錦町一丁目　株式會社　明治書院